



Title	薄雪物語と御伽草子・仮名草子
Author(s)	松原, 秀江
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/42951">https://hdl.handle.net/11094/42951</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	まつばら しょうえ 松原 秀江
博士の専攻分野の名称	博士 (文学)
学位記番号	第 14968 号
学位授与年月日	平成 11 年 10 月 12 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	薄雪物語と御伽草子・仮名草子
論文審査委員	(主査) 教授 伊井 春樹 (副査) 教授 後藤 昭雄 助教授 渡邊志津子

## 論文内容の要旨

本論文は、「御伽草子」、「仮名草子」とよばれる日本の中世、近世小説を、その形態、内容、変遷、享受等、様々な角度から照射し、文学史上に位置づけようとしたものである。本論文は、全体を 4 章とし、「『薄雪物語』とものあはれ」以下 11 の各論によって構成され、400 字詰原稿用紙にしておよそ 700 枚余からなる。

第一は、著者の研究の中核をなす『薄雪物語』論である。『薄雪物語』論は、江戸時代のロングセラーの仮名草子であり、艶書文範として享受された。そのみならず、古典のダイジェストあるいは入門書としても読まれていたが、著者はそれに加えて、同書の主人公薄雪が「ものあはれ」を解する女性として描かれていることに注目している。古典をはじめとする教養を身につけ貞女・賢女であることを願いながら、「ものあはれ」を解するやさしきゆえにこの世に生きながらえることのできなかつた主人公に、啓蒙実用書としての仮名草子のみならず、煩惱即菩提の物語としての性格を読みとり、多くの仮名草子をもつ側面でもありと考察する。

また、『薄雪物語』は挿絵が喜ばれ、本文が省略される傾向があつたにも関わらず、挿絵は追加されていく。そこに好色本としての性格を見だし、祝言性の強い恋物語であることも指摘している。そして著者は、五十種に近い諸本を調査した後、整理分類し「『薄雪物語』版本考」として、慶長年間から明治年間にいたるまで読まれ続けたその普及の実態を詳述していく。

第二では、御伽草子、仮名草子の享受論を中心とする。すなわち女性の素養としての古典が、他の実用記事とともに御伽草子、仮名草子の中に取り込まれており、その中核をなすのは『百人一首』『源氏物語』『伊勢物語』であることを指摘している。そして出版された本の形態は、中本という流布しやすい形のものであり、その後より大衆化した赤本、青本、黒本といった草双子へ変遷していくことにも言及している。

第三は、御伽草子の代表作『はちかづき』と仮名草子の代表作『浮世物語』の作品論である。観音利生譚としての前者に深い仏教性を読み、後者においては仏教と儒教の併存を見出している。

第四では、これらの草子を貫く思想を考察している。すなわち、前章を受けて、儒教、仏教のうち、仏教思想が基底にあってはじめて儒教思想が生きた教えになりえたとする。そして「学文」は「心」を見極めることとする当時の

文学観から、「言」すなわち言葉は「心」の声であるとする。仮名草子の歌徳説話の根元にはそうした言葉に対する理解があり、「心」を三十一文字にたくした和歌ゆえに神仏は感応する、と著者は解釈しているのである。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、『薄雪物語』を中心に中世、近世小説を研究テーマとしてきた著者の、これまでの業績の集大成といえる。取り上げられている作品は、『薄雪物語』のほか、『はちかづき』『浮世物語』『和歌威徳物語』といったそれぞれ性格の異なる物語であり、かつそれらはこのジャンルの代表的作品ともいえるものである。つまり個々の作品を掘り下げることにより、中世、近世小説の全体に迫ろうとしている。

最近、中世、近世小説の諸本が博搜されているが、内容が単純なものであるだけに作品論は多くはない。その中で、著者は、真っ向から作品に向かい、草子の中に深い思想性を見ようとする。また、大衆化されたこれらの物語は、おびただしい数の諸本を生んでいるが、著者は、その一つ一つにあたり、諸本研究にいちじるしい成果をあげることができた。その労作を背景にした作品への深い読みは、高く評価されるべきであり、また本文や挿し絵に関する新見解は多く首肯される。挿し絵と本文とのかかわりは、今日さまざまな作品で試みられるようになっているが、『薄雪物語』でも詳細な分析を通じて、貴重な成果を得ることができた。

しかし、本論文は各論の考証にとどまりがちで、中世、近世小説としての全体論への論究にやや欠ける点が、もっとも大きな問題点であろう。中世・近世初期は、膨大な作品が生み出され、それにもない伝本の数の多さもあって、どうしても各作品論に傾きがちなのが現在の研究状況であるが、そのあたりもうすこし積極的に文学史への構築を展開してもよかったのではないかと判断する。いずれは、中世、近世小説全体としてとらえなおし、叙述し、文学史上に確たる位置づけをすることが、申請者に残された大きな課題でもであろう。

以上、問題点は含んでいるが、中世、近世小説を、調査分類という労作の上に立って、さらに新たな視点で読み込み、文学的価値を与えた、本論文の意義は認められるべきであろう。よって、本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。